

距離と親しさ

—若い世代のポライトネス—

● 高橋 圭子

1. はじめに

年配の世代は、若い世代の言葉遣いを非難し、嘆くことが多い。しかし、若い世代による新しい言葉遣いは、言葉が乱れているためでも若者に常識や教養がないためでもなく、言葉の変化という面から合理的裏付けが見出せる場合が少なくない¹。

本稿ではそのような例の1つとして、若い世代のポライトネスについて考察を試みる。

2. 理論的枠組み

2.1 ポライトネス理論

ポライトネス (politeness) とは、コミュニケーションにおける対人関係への配慮であり、これをめぐる普遍理論として Brown & Levinson (1987) がある。本節ではこの理論の概略を、滝浦 (2008)・高橋 (2016) などを参照しつつまとめる。

人には、基本的欲求として、他者から認められたい・賞賛されたいというポジティブ・フェイス (positive face) と、他者から踏み込まれたくない・邪魔されたくないというネガティブ・フェイス (negative face) がある。そして、原則として自分のフェイスも他者のフェイスも互いに守り尊重し合おうとしている。しかし、人と人の接触には、フェイス侵害のリスクが避けられない²。そこで、人はフェイス侵害行為 (Face-Threatening Act: FTA) の補償として、ポジティブ・フェイスに訴えるポジティブ・ポライトネス (positive politeness) や、ネガティブ・フェイスに訴えるネガティブ・ポライトネス (negative politeness) といった方略 (strategy) を用いる。ポジティブ・ポライトネスは距離を縮め親愛感・連帯感を表すものであり、ネガティブ・ポライトネスは距離をとって相手の領域に踏み込まないようにするものである。

FTA のリスクの度合いは (1) の計算式によって見積もられ、それに応じて補償の方略が (2) のように選択される。(3) はポジティブ・ポライトネス、(4) はネガティブ・ポライトネスの例である。

$$(1) W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$$

W_x = ある行為 x の相手に対するフェイス侵害のリスクの度合い

$D(S, H)$ = 話し手と聞き手の社会的距離

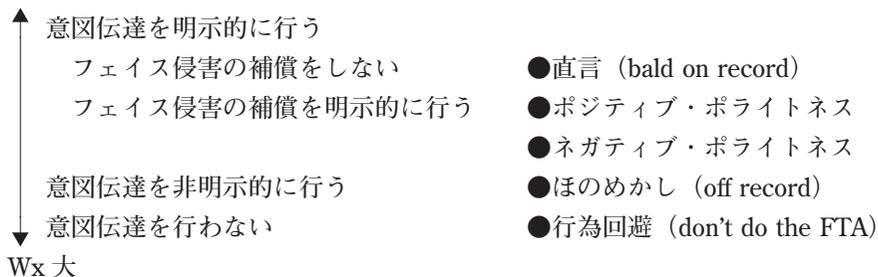
$P(H, S)$ = 聞き手の話し手に対する力

R_x = 特定の文化における行為 x の負荷の度合い

W (weightiness), D (distance), P (power), R (ranking of imposition),

S (speaker), H (hearer)

(2) W_x 小



(3) a. 仲間であることを示す…タメ語を使う・仲間内 (in-group) の言葉を用いる

b. 共感・共通性を示す

「電車でクーラーが寒過ぎること {ありますよね／あるじゃないですか}」

c. 協力・共同性を示す

(教師が学生に)「来週は試験ですから、頑張りましょう。」

d. 関心を示す・ほめる

「あ、髪切った? いいじゃん! どこで?」

e. 楽観視する

「大丈夫だよ、次は絶対受かるよ」

「いつもトイレをきれいにご使用いただき、ありがとうございます。」

(4) a. 敬意を表す…敬語を使う・敬称を使う

b. 断定を避ける・曖昧にする

「その日はちょっと予定がありまして……」

c. 謝罪する

「ごめん、教科書忘れちゃった、見せてくれる?」

d. 相手の負担を小さくする

「ちょっとお願いがあるんだけど…」 「少々お待ちください」

e. 否定的に述べる・悲観する

「3時までにはお願いできないでしょうか?」

f. 一般化する・間接化する

「ここは、禁煙になっております」「その棚、届く?」³

g. 時制・人称などをずらす

「具合が悪いんだったら、病院に行ったほうがいいよ」⁴

「今度の歓送迎会、部長もいらしていただけますか?」⁵

日本語の場合、敬語専用形式の体系があるため、言語上の配慮すなわち敬語と見なされやすい。しかし、ポライトネス理論の枠組みによれば、敬語はネガティブ・ポライトネスの一つに過ぎず、配慮表現には他にもさまざまなものがあることがわかる。

2.2 日本語におけるポライトネス

近代以前の身分・階級制から近代以降の民主制へ、社会体制の変化に伴い、配慮表現も Power による上下関係から Distance による親疎関係へ比重が移行してきている。これは、通言語的に見られる現象である⁶。

日本語もこの例外ではない。従来の日本語は、上下関係に基づくネガティブ・ポライトネスの比重が高く、ポジティブ・ポライトネスはあまり発達してこなかった（滝浦2013）。しかし、近年、若い世代を中心に親疎関係に基づくポジティブ・ポライトネスの比重が高まっている（大学英語教育学会中部支部待遇表現研究会2000、伊集院2004など）。ネガティブ・ポライトネスは距離をとる、ポジティブ・ポライトネスは距離を縮める、つまり正反対の方向の配慮表現である。この矛盾とも言える両方向のポライトネスを実現するべく、若い世代はさまざまな工夫を編み出している。

(5) 先生、メシ食われましたか。

(6) 鈴木 (1997) より

- A1 この間はどうも有難うございました。
2 あれ、すごーく、きれい。
B3 そうでしょ。
A4 色もいいし。
5 あれ、全部始めからでしょ。
B6 そう。
A7 もっといっぱい欲しいなあ。
B8 そら、よかった。
A9 自分で買いたいんですけど、普通に売ってますか？

(5) は、「先生」という敬称や「れ」という尊敬語、「まし」という丁寧語を用いてネガティブ・ポライトネスを表すとともに、「メシ」「食う」という仲間内のくだけた表現を用いてポジティブ・ポライトネスを表している。

(6) は、同様の方略が談話レベルで用いられている例である。話者 A は、1（謝礼）・9（質問）など話者 B に直接向けた発話には丁寧体を、2・7 など自身の感情を述べる独話風の発話には普通体を用いて、ネガティブ・ポライトネスとポジティブ・ポライトネス、距離と親しみをともに表現しているのである。

このような工夫の例は、他にも多く挙げられる。しかし、年配の世代にはその配慮が理解されず、世代間ディスコミュニケーションがしばしば生じている。

本稿では、このようなケースの1つとして、他者に対する自分の親の呼称をとりあげ、パイロット調査を試みた結果を報告する。

3. パイロット調査

3.1 目的

2017年1月29日の『朝日新聞』東京版には、(7) のような読者の投書が掲載されている。

(7) 「お母さん」でなく「母」と言って 主婦 (千葉県 45)

いつごろからでしょうか、10代、20代の若い方がよそ様に「うちのお母さんは」と話すようになったのは。最近も、ラジオのパーソナリティーの方が「お母さん」を連発していました。聞いているこちらが恥ずかしくなりました。

家庭で「ママ」と呼ぶから、外では「お母さん」が丁寧語だと思って使うのでしょうか。「母が」と話されている若い方を見かけると、ほっとします。親御さんがきちんと育てていらっしゃるのですね。

「お母さんが」もそうですが、電車内で化粧をしたり、「させて頂く」と話したりする方が多数派になるのが怖くなります。正しい言葉遣いやマナーを覚えるのは、スマホ操作より簡単では？ 何より、その人を美しく見せてくれます。

家族の呼称には、表1に示すように、A・Bの2種類がある。話し相手が家族外的时候には、家族はウチ (in-group)、相手はソト (out-group) であり、ソトに対してはAの呼称を用いるべきであり、ウチの呼称であるBを用いるべきではない、とするのが従来の規範である。

表1 家族の呼称

A	B
父	おとうさん・パパ
母	おかあさん・ママ
姉	おねえさん・おねえちゃん
兄	おにいさん・おにいちゃん
祖父	おじいさん・おじいちゃん
祖母	おばあさん・おばあちゃん

しかし、近年、(7)のいうように、Bの呼称を用いる若い世代が増えている。だが、この現象は、恥ずかしい・正しくないとただちに決めつけられるものなのだろうか。2.2節で見たような、若い世代の新しいボライトネスの方略の1つなのではないだろうか。Aの呼称は、相手をソトとして遠ざけることになる。Bの呼称で、相手をウチとして近づけ、親しみ・仲間意識を表そうとしているのではないだろうか。

3.2 調査の概要

3.1節の仮説を検証するため、小規模なパイロット調査を試みた。概要は(8)のとおりである。

(8) 日時：2016年12月14日

場所：某大学 (東京都)

方法：授業支援システムによるインターネットを利用したアンケート調査

対象：筆者の担当する授業の受講生 (文学部2～4年生) 127名

質問：次の相手に、自分の親のことを何と言いますか。

1. 同世代の親しい友人に (同・親)

2. 同世代の親しくない人に (同・疎)
3. 親しい目上の人に (上・親)
4. 親しくない目上の人に (上・疎)
5. 親しい目下の人に (下・親)
6. 親しくない目下の人に (下・疎)

選択肢： A 父／母 B お父さん／お母さん C パパ／ママ
 D おやじ／おふくろ E その他

3.3 結果と分析

調査の集計結果は、表2に示すとおりである。

表2 他者に対する親の呼称

	同・親		同・疎		上・親		上・疎		下・親		下・疎	
	人数	%										
父／母	15	11.8	49	38.6	64	50.4	111	87.4	24	18.9	54	42.5
お父さん／お母さん	76	59.8	65	51.2	51	40.2	11	8.7	79	62.2	53	41.7
パパ／ママ	16	12.6	4	3.1	8	6.3	0	0.0	8	6.3	6	4.7
おやじ／おふくろ	7	5.5	2	1.6	0	0.0	1	0.8	8	6.3	5	3.9
その他	13	10.2	7	5.5	4	3.1	4	3.1	8	6.3	9	7.1
計	127	100.0	127	100.0	127	100.0	127	100.0	127	100.0	127	100.0

調査の際、選択肢「お父さん／お母さん」には「父さん／母さん」「お父ちゃん／お母ちゃん」なども含め、選択肢「パパ／ママ」には「ダディ／マミー」なども含め、自由記述欄にその旨記入するよう依頼した。しかし、該当数は多くなかった。選択肢「その他」は具体的呼称を自由記述欄に記入するよう依頼したところ、「親（おや）」が最も多く、「父親／母親」「両親」、名前と言う、などの回答があった。父親と母親で用いる呼称の組み合わせが選択肢と異なる例も1例あった。

ここでの目的は、規範の「父／母」と規範外の「父／母」以外の呼称を比べることであるため、「父／母」とそれ以外の呼称とで再集計したものを統計的に解析した。選択肢「その他」は除外した。解析に用いたデータは表3、結果は(9)のとおりである。

表3 他者に対する親の呼称の規範とそれ以外

	同・親		同・疎		上・親		上・疎		下・親		下・疎	
	人数	%										
「父／母」	15	13.2	49	40.8	64	52.0	111	90.2	24	20.2	54	45.8
「父／母」以外	99	86.8	71	59.2	59	48.0	12	9.8	95	79.8	64	54.2
計	114	100.0	120	100.0	123	100.0	123	100.0	119	100.0	118	100.0

- (9) a. 「同・親」と「同・疎」 $X^2(1, N=234) = 22.535$ $V = .310$ $p = .000$
 b. 「上・親」と「上・疎」 $X^2(1, N=246) = 43.736$ $V = .422$ $p = .000$
 c. 「下・親」と「下・疎」 $X^2(1, N=237) = 17.579$ $V = .272$ $p = .000$
 d. 「同・親」「上・親」「下・親」と「同・疎」「上・疎」「下・疎」
 $X^2(1, N=717) = 66.926$ $V = .306$ $p = .000$
 e. 「同・親」「同・疎」と「上・親」「上・疎」と「下・親」「下・疎」
 $X^2(2, N=717) = 111.555$ $V = .394$ $p = .000$

(9) a,b,c のいずれにおいても0.1%水準で有意差が認められた。ここから、相手が同世代・目上・目下のすべての場合に、相手との親疎関係と自分の親を表す呼称の間には関連性があることがわかる。また、(9) d,e のいずれにおいても0.1%水準で有意差が認められた。ここから、相手との親疎関係も上下関係もいずれも自分の親を表す呼称に関連性があることがわかる。そして、クラメル連関係数 V を比較すると、e. のほうが d. より大きい。ここから、自分の親を表す呼称の選択には、上下関係のほうが親疎関係より関連性が大きいことが示唆される。

4. まとめと課題

今回の調査の結果からは、自分の親を表す呼称として規範の「父/母」以外を用いるのは、相手をウチ (in-group) と位置付け親しみを表すポジティブ・ポライトネスの一環であると言える。

また、規範と規範以外の呼称の選択は、親疎関係以上に上下関係が大きな要因となっていることも示唆された。年配の世代が嘆くより、若い世代は言葉遣いの規範をわかまえていていると言える。

アンケートによる意識調査は実態と必ずしも一致しない。さらなる調査を試みたいが、家族はプライベートでデリケートな話題でもある。調査の際には入念な配慮が必要である。

若い世代の言葉遣いに驚くことは、正直なところ、少なくない。それを一方的に否定するのではなく、その要因を丁寧にさぐっていく作業を続けることが、言葉に携わる者としての大切な仕事であると考えている。

謝辞：統計についてご教示くださった新井保裕氏 (東京大学)、調査にご協力くださり、また、若い世代のことばについてさまざまな情報をくださる学生の皆さん、そして、本稿提出の機会を与えてくださった跡見学園女子大学に、心から感謝申し上げます。

参考文献

- 伊集院郁子 (2004) 「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け—母語場面と接触場面の相違—」『社会言語科学』6-2, pp.12-26. 社会言語科学会
 井上史雄 (1998) 『日本語ウォッチング』岩波新書
 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』岩波新書
 鈴木睦 (1997) 「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」田窪行則編『視点と言語行動』pp.45-76, くろしお出版,
 大学英語教育学会中部支部待遇表現研究会 (2000) 『現代若者ことばの潮流:距離をおかない若者たち』大学

英語教育学会中部支部待遇表現研究会

高橋圭子 (2016) 『自然な敬語が基本から身につく本』 研究社

滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』 研究社

滝浦真人 (2013) 『日本語は親しさを伝えられるか』 岩波書店

Brown, P. & Levinson, S. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press.

ブラウン&レヴィンソン、田中典子監訳 (2011) 『ポライトネス—言語使用における、ある普遍現象—』 研究社

Brown, R. & Gilman, A. (1960) The Pronouns of Power and Solidarity. In Sebeok, T. A. (ed.), *Style in Language*, pp. 253-276. MIT Press.

注

- 1 例えば、「ら抜き言葉」は可能動詞の形式を統一し、「れる／られる」の意味を明確化するものであり、単純化・明晰化という言語変化一般の流れに合致する (井上1998)。
- 2 例えば、勧誘や依頼は相手の将来の行動を拘束するため相手のネガティブ・フェイスを侵害し、感謝や謝罪は自身のポジティブ・フェイスを侵害するリスクがある。
- 3 直接「その棚にある箱を取ってくれ」と言うのではなく前提となる能力を尋ねることで間接的な依頼になる。
- 4 英語でも *Would you ~? · Could you ~?* など過去形を使うことでネガティブ・ポライトネスを表す。飲食店での「ご注文は以上でよろしかったでしょうか」といった表現もこれと同じ方略であると考えられる。
- 5 日本語では「あなた」などの二人称代名詞は用いられにくく、目上の相手を指す場合には「先生」「社長」などの役職名により三人称として扱う (鈴木1973)。
- 6 Brown & Gilman (1960) でもすでに指摘されている。Brown & Gilman (1960) は、ヨーロッパの言語における T (親称) と V (敬称) の2種類の二人称単数代名詞の使い分けを、力 (power) と仲間意識 (solidarity) の変数を用いて分析したもので、Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論の先駆的研究の1つである。